【中学校の部】優秀賞

私の「家族」

臼杵市立南中学校　３年
白根　美里

私がこの地域に引っ越してきて、もう10年が経つ。私の家は５人家族だが、この地域に来て、私の、「家族」と呼べる人が増えた。

まずは、隣に住む、庭で花や野菜を育てているおばちゃん。とても明るく笑顔が素敵だ。学校帰りに会うと、「お疲れ様。今日も暑かったね～」なんて言って、ジュースをくれる。おばちゃんが育てた野菜の苗をくれることもあって、我が家の庭にはトマトや大葉、パセリなど、おばちゃんの子どもたちがすくすくと成長中だ。弁当の彩りや料理のトッピングにとても助かっている。斜め向かいには、釣り名人のおいちゃん。家には立派な釣り竿が何本もあり本格的だ。釣れた魚を我が家にもお裾分けしてくれる。毎回いろいろな種類の魚をくれるので、魚好きの私たちにはたまらない。田畑でいつも農作業をしている働き者のおいちゃんも忘れてはならない。ある時は我が家の庭に、またある時は玄関のドアに、そっと野菜を置いていってくれる。我が家が食べている野菜の半分はおいちゃんからいただいたものといっても過言ではない。季節に合った野菜を育てていて、一年中、旬の野菜が食べられる。そんな人達が私の周りにはたくさんいる。私の体はおいちゃんやおばちゃんのおかげでできているようなものだ。

体だけではない。大事な試合の前には、一体どこから聞いたのか分からないが、「頑張ってね」と声をかけてくれた。その一言にどれだけ勇気づけられたか分からない。毎日のように野菜や魚を「うちじゃあ、食べきれんけん」と持ってきてくれる度に、私たちの存在を認めてくれているような気がして、心が温かくなる。この地域には、そうやって十年間私を見守ってくれた人がたくさんいて、私の体と心を成長させてくれた。そんなおいちゃんやおばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんは、もう私の「家族」だ。

しかし、この地域もどんどんと高齢化が進み、そんな「家族」に変化が起きている。小学生の頃、家の前に立って私たちの登校を見守ってくれたおじいちゃんは、体調を崩したらしく、すっかり見かけなくなった。私の下校といつも散歩の時間が重なってガールズトークに花が咲いたおばあちゃんも、「最近見かけなくなったな～」と思っていたら、介護福祉施設に入所したそうだ。毎日元気に散歩をしていたおばあちゃんの、買い物帰りに坂をきつそうに登る姿も見かけるようになった。そんなおばあちゃんに、母は「帰り道一緒やけん、送るよ」と声をかけて家まで送るらしい。

私が大きくなるにつれて、みんなが小さくなっていく。その現実に切なくなった。あんなによくしてくれたみんなに、私は何か返すことができるだろうか。母のように運転免許証を持っていれば、みんなの移動を手助けすることもできるが、中学生の私には無理な話だ。気持ちはあるのに何もできない自分の無力さが歯がゆかった。

そんなとき、母が「近所の人がね、『みさっちゃんは学校の様子とかを楽しそうに話してくれるから元気をもらえる』って言ってたよ」と話してくれた。落ちこんでいた私だが少し元気が出てきた。そう言えば、新聞に私が載った時には「切り抜いてノートに貼っちょんので」とうれしそうに言ってくれた人もいた。私が何気なく話していることや私が頑張っていることが、みんなを元気にしている…私にもやれることはあるのだということに気付けた。

新型コロナウイルスの影響で地区の行事も減っているが、そんな時だからこそ、ゴミ拾いや公民館掃除に積極的に参加して、小さくなっていくおじいちゃん達に代わってできることをしていきたい。小さな変化に気付けるように、たくさん声をかけていきたい。私の笑顔で元気を届けたい。血はつながっていないけれど、みんな大切な私の「家族」だから。